別紙４

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論 文 題 目

多国籍ユニオニズムにおける運動資源の動員構造と戦略的アプローチの解明
―GU の事例分析をとおして―

Mobilizing Structures and Strategic Approach of Multinational Unionism (MU):
A Case Study of GU in Japan

氏　　名　中根 多惠

論　文　内　容　の　要　旨

研究の背景と本論文の課題　現代の日本社会における＜労働のグローバル化＞が社会的連帯を可能にするしくみが十分に整えられていないまま深化することで、＜労働のグローバル化＞のもとで増加を続けるマイノリティが問題を抱えつつも社会のなかで連帯なき孤立を迫られることが、今日および今後の重大な社会問題として浮上している。とりわけ、不安定雇用労働者かつ外国人であるいわば＜二重のマイノリティ＞ともいえる立場に置かれた外国人労働者をめぐる労働問題は、日本人労働者の問題とは異なるコンテクストのなかに位置づけられ、企業別労働組合の組織範囲に及ばないところで解決されないままでいる。本論文はこうした社会問題を取り上げ、社会運動ユニオニズム（SMU）研究の視点からヒントを得て、多国籍な労働者たちがアクターとなる労働運動を「多国籍ユニオニズム（MU）」として着目し、今日の日本社会のなかで MU による連帯がいかに可能なのかという問いを、労働社会学および社会運動論的視点から解き明かそうとするものである。

本論文の分析視角と分析対象　本論文では、MU の組織的脆弱性（第一障壁）およびアクターが＜二重のマイノリティ＞であるがゆえの運動障壁（第二障壁）という障壁の二重構造に着目し、こうした障壁を打開するための資源動員戦略に研究的関心を据える。具体的には、外国人労働者の組織化に成功した MU の先駆的事例を対象としたケース・スタディをとおして、労働組合が採用する戦略のリアリティに迫り、その戦略の構造を社会学的視角から説明する方法を採用する。そのさいには労働組合をとりまく諸領域へのはたらきかけに焦点をあてる方法をとる。本論文では、語学産業に従事する欧米系外国人組合員の組織化に成功した MU の先駆的事例として位置づけられる「ゼネラルユニオン」（GU）を対象事例として有意抽出する。

データと方法　2009 年 12 月から 2014 年 7 月現在までおよそ 4 年半にわたる筆者による組合員としての参与観察法調査から得られたデータに依拠する。その過程で実施した GU の中心的メンバーおよび一般組合員へのフォーマル・インタビューおよびインフォーマル・インタビューから得たデータや、GU 執行委員会による著書や機関誌といった刊行物などの二次資料、ニューズレター、総会時に配布された資料、PL1 支部会議で配布されたレジュメ、ビラ、組合加入書、GU の活動を取り上げた当時の新聞記事などの一次資料なども用いる。また、筆者が 2010 年 9 月および 2013 年 3 月に実施した 2 回の質問紙調査から得た定量的データも用いる。さらに、GU の特色を抽出するために 2012 年に実施したユニオンみえを対象とした質的調査のデータ（委員長への聴き取り調査の記録、一般組合員への聴き取り調査の記録、団体交渉への参与観察時のフィールドノーツ、さらに機関誌、新聞記事、写真などの一次資料）も補完的に用いることとする。

事例分析とそこから得られた知見　本論文では、第 4 章から第 6 章において事例分析をおこなった。まず、第 4 章では、GU による未組織労働者層へのアプローチに着目して分析をおこなってきた。とりわけ本論文が着眼したのは、未組織領域から新しい組合員をリクルートするための活動に力点を置き、なおかつその活動が一定の成果を収めていると判断できる PL1 支部の事例であった。さらに、PL1 支部では労使関係が比較的安定しており、組織化の緊急性があまりないにもかかわらず、こうした持続的なメンバーの動員に成功していた。PL1 支部の支部長をはじめとする組合員たちのインタビュー記録から明らかになったのは、外国人組合員が日常的に包含されているインフォーマルな職場の社会的ネットワークが新しいメンバーの動員に重要な役割を果たしていることであった。ここで重要なのは、こうした新しいメンバーの動員が、非日常的で形式的手段を介して確立しているものではなく、むしろ組合員によって日常的な実践のなかで形成される友人ネットワークを利用しておこなわれていたという点である。具体的には、PL1 支部のメンバーたちによる仕事終わりの職場仲間との私的な集まりの場面で、私的経路を介した新しいメンバーを持続的に動員する構造が確認された。こうしたインフォーマルな社会関係を介するメンバーの動員は、PL1 支部に限らず、GU の多くの支部においてみられる。また、GU の事例では、ニューズレターを置く場所への工夫やランク・アンド・ファイルレベルの組合員による支部内でのリクルート活動など、新しいメンバーのリクルートのさいに組合員および未組織状態の潜在組合員の日常生活領域を戦略的に利用している事実が明らかになった。こうした動員方法は、流動性の高い外国人組合員を持続的に動員し、メンバーシップを確保する必要のある状況―本論文が想定する MU の運動障壁のうち第一障壁とよぶ組織的基盤の脆弱性への対処―にたいして重要な役割を果たしているといえる。

第 5 章の分析では、GU の組合員へのアプローチに着目をした。GU をはじめとする MU において、第 4 章で示したように未組織労働者層を「加入」させることに成功したばあいでも、組合員として持続的に組合組織にとどまり、組合活動に積極的に参加しなければ、組合組織の基盤を維持することはひじょうに難しい。とりわけ GU では、組合の活動費のほとんどが組合員の支払う組合費で占められているため、より持続的なメンバーシップの確保と活動参加へのモチベーションの維持が必要不可欠になる。こうした課題をふまえたうえで、第 5 章では GU における組合員が活動に参加する要因あるいは動機を解明することを目的として、組合員への質問紙調査のデータを分析した。その結果から明らかになったのは、まず、加入した動機づけのちがいが、組合員の活動参加の度合いに影響を与えることが明らかになった。労働組合に加入した動機が、友人をサポートするためや何か良いことをするためであるような、いわば「ボランティア型」の加入動機であるばあいには、活動参加がより促進された。その一方、万が一に備えて加入する「保険型」加入のばあいには活動参加の度合いは抑制される結果になった。つづいて検証した動員ルートによる効果については、マスメディアやビラをとおしたリ

クルートの効果は確認できなかった一方、友人からの紹介をとおして GU を知り、加入した組合員であればあるほど活動へ参加する傾向がみられるという結果が得られた。また、組合員の活動参加が、連帯の強さ、仲間とのコミュニケーション、活動の充実感を得られるという条件によって動機づけられていることも明らかにされた。

最後に、第 6 章では、GU のホスト社会へのアプローチに着目した分析をおこなった。すでにふれてきたように、本論文で着目してきた MU では、その特質上、「外国人」「労働者」「非正規」など、運動にさまざまな枠づけと意味付与をすることが可能である。MU として運動を展開するとき、担い手が＜マイノリティ＞であることによって困難性は想定されるものの、運動の主体が誰であれ、「誰のための」運動として自らの運動をフレーミングしていくのかという点ついてはさまざまな選択肢がある。「外国人」あるいは「多国籍」という運動のフレームを提示し、その特定のアイデンティティを主張するとき、そうした特定のアイデンティティに執着しすぎてしまうと運動の同質性・閉鎖性につながり、結果的にホスト社会（あるいは市民社会）とのつながり、あるいはホスト社会からの資源動員に失敗してしまう恐れが生じる。GU の事例からは、2 つの種類のホスト社会（市民社会）に向けたアプローチが確認された。まずひとつめは、マスメディアや市民社会的公共空間を運動のフレームの発信のさいに活用することで、MU 特有の特定のアイデンティティを強調するアプローチである。もうひとつは、MU において懸念される組合組織の閉鎖性を打開するため、日本人活動家のもつ組織間のネットワークを利用してそこに参入し、市民社会全体に調和するような社会問題やイシューをあえて掲げることで GU を市民社会のなかに位置づけようとする努力であった。GU は、ホスト社会のなかにすでにあるネットワークに参入したり、こうしたネットワークを介して市民社会と共有しうるイシューへの活動に参加したりすることによって、運動のフレームを拡張し、MU 的側面の表出というアプローチからは得られない市民社会からの理解を獲得できるのである。

結論　GU では障壁の二重構造にたいして、運動資源の動員のためのさまざまな戦略アプローチを採用していた。組織的な基盤の弱さが運動の妨げとなる第一の運動障壁に関しては、非制度的かつエスニック・コミュニティ領域から外国人相互の社会関係やエスニック組織間のネットワークなどを動員し、それが未組織労働者の組織化や一般組合員の組合活動参加を促進していた。そして、多国籍ユニオニズム特有の障壁である外国人にたいする社会構造上の制約を乗り越えるために GU が採用していた戦略は、非制度的／ホスト社会領域からマスメディア、日本人活動家のもつ資源、市民社会的公共空間などを運動資源として動員したり、動員のためのフレーム調整によってホスト社会と共有できる問題を取りあげたりといったものであった。また、こうした動員戦略は、GU という特殊な組織のイメージ形成や正当性の調達に機能することも同時に観察された。さらに、こうしたホスト社会領域からの資源動員は、多国籍ユニオニズム（MU）にみられる組織内の同質性や閉鎖性といった負の側面を打ち消し、GU を市民社会のなかに位置づけるはたらきもすることが明らかになった。